倉沢里山を愛する会 会報

# ENJOY アリスの丘 風の丘 Farm NEWS LETTER

**倉沢里山を愛する会 会報**
**アリスの丘・風の丘ファーム**
*NEWS LETTER No.11.*
2001 年 11 月 1 日発行
代 表 峰岸 純夫
事務局 田村 裕介
東京都日野市百草 698-6
TEL/FAX (042)592-5859
Email: alice-fm@mail.hinocatv.ne.jp
http://www.hinocatv.ne.jp/~alice-fm

# 私の健康畑作り

唐木澤 泰子

菜園を始めて十数年。「今年こそ、いい物作ろう!!」が年々の目標になってしまった。私の一番の狙いはトマト。大好物なのだ。苗は第二花が咲くまで家で育て定植には特に手をかける。土は深く耕し堆肥をたっぷり。肥料のやり方にも気を使う。伸びの早い脇芽はまめに摘む。今年もトマトは答えてくれた。消毒もほとんどしていないのに病気にかからず五段、六段と沢山の実をつけてくれた。まだ口もきけない孫まで「おいしい、おいしい」と皿にこぼれ出た汁まですすっていた。完熟トマト、これぞ健康の源なのだ。

ナス、キュウリ、ピーマン、ジャガイモなどもまずまずの出来映えだった。反面、例年どうも上手に出来ない作物もある。トウモロコシ、枝豆である。今年も枝豆はよく繁ったのに一粒残らず虫に食べられてしまった。あんなに丈夫なさやに守られているのに。それ程に甘い甘い汁だったのだろう。今は全部里芋に敷かれている。せめて芋を太らせておくれ。「来年こそは枝豆を……」

それにしても小さな小さな種がひとたび土に入ると自然と根を出し枝を張りやがて沢山の実をつける。人にとって植物から与えられる恵み、喜び、希望は計り知れない程に大きい。小さな種に宿る生命力が十分発揮できるように、人もその環境作りのお手伝いをしよう。時はまさに落葉の季節。さあ、いっぱい木の葉を集めよう！堆肥を作ろう。土作りの準備をする時なのだ。小さな種が十分根を伸ばし、枝を繁らせ、実を結べるように。

## 里山の植物誌（10）

### オケラ（キク科）

「山でうまいはオケラにトトキ」という俗謡を話しながら母はツリガネニンジンと比較にならない美味しいものとして教え、摘んで食べた故郷の村に林は全部なくなり、オケラ摘みは思い出の中にしかない。都の『レッドデータブック』にも載せられているこの植物が倉沢里山にたくさん自生していることが今年の散策会でわかり、６０数年前の過去の記憶を蘇らせた。食用には綿毛をかぶっている若芽を採るが、花の季節には触れると紅花に近い感じを受ける。花の苞葉と堅い葉の縁には棘状の鋸葉があり花は地味でも風情がある。

そこで『万葉集』巻一四東歌、武蔵国の相聞（恋）歌として「恋しけは袖も振らむを武蔵野のうけら（宇家良＝オケラ）が花の色に出なゆめ」（恋しいなら私が袖を振りもしよう。決して恋心を顔色に出してはいけないよ）という意味で詠まれている。長年庭で観察していると、初期は白色で目立たないが、やがて薄紅色に変化する。花をよく観ていない限り、万葉人は恋心を秘めることと顔色に出すことと結びつけた歌は詠めなかったと思う。（峰岸立枝・紀）

## 倉沢緑地ボランティアへのお誘い

今回は緑地の**落ち葉掃きと**昨年大好評の**芋煮会。**
参加する方は事前に事務局までご連絡下さい。

日時・集合場所

**１２月８日（土）**　１０時、倉沢第２緑地集合
雨天の時は翌日の同時刻

持ち物　手袋、飲み物、ご飯、お椀、お箸
参加費　200円（食材代）

# 2001夏・デンマークの森紀行

藤田　裕子

2001.7.25（快晴）。 私は、叔父、叔母（デンマーク人）が住む、デンマークにやって来た。

ちょうど叔父の休暇と重なり、着いた日の午後から、叔父、叔母と共にデンマークの一番西に位置するバルト海に浮かぶ島、BORNHOLM島に2泊3日の旅行に出かけた。BORNHOLM島は避暑地として有名で、多くのデンマーク人がこの時期に島を訪れる。

麦畑が広がる中、車をとばしホテルに向った。午後6時到着。急いでホテルで夕食を済ませ、午後8時過ぎホテル前の湖一周の散歩に出かけた。

日没が午後9時30分頃だったので外はまだ明るく、風景を楽しみながら歩く事が出来た。途中私達と同じ様にBORNHOLMの美しい景色がゆっくりと流れる中、楽しんでいる人達に出会った。私が不思議そうな顔をすると叔父が「これが夏の過ごし方なんだ」と言っていた。私は夢心地のまま床に就き朝を迎えた。

朝食を終え、午前11時ホテルを出発。本日最初の目的地：Paradisbakkerne （Paradise Hillsという森）に車で向った。車窓からは、快晴の中老若男女が様々なスタイルでサイクリングをしている姿が見える。この風景は、島のどこを走っていてもみかけられた。途中水を買い、目的地到着。入り口でポストに入っている森の無料地図をもらい、4時間のYELLOW TRIANGLEコースに挑む！！背中にリュック首に双眼鏡をかけ準備万端。いざ出発！....　歩き始めてすぐ目の前に野生のブルーベリー畑が広がっていた。叔母と共に興奮し手いっぱいに採り、口に入れると次の瞬間、満面の笑みで向き合った。

写真右側が筆者

向いからやって来た家族はブルーベリーがいっぱいつまった瓶を手にしていて、瓶を持参しなかった事を悔やんだ。

森は、手入れが行き届いているのか、又はマナーを守る人が多いのか、ゴミが落ちておらず、林には木のチップが敷き詰められてあり、そこからは様々な種類のジャンボキノコがはえていた。キノコに見とれていると叔父に肩を叩かれた。見ると草陰からきつねが顔を覗かせていた。その後子鹿に出会ったり、木の上からはロビン・ブラックバードと美しい鳥のさえずりが聞こえ、その度毎双眼鏡が活躍した。又途中鈴なりに実をつけている大きな桜の木に出会い、3人で協力して採ったサクランボの味は格別だった。私はこんなに楽しいトレッキングをしたのが初めてだった事と、今まで余りにも森の楽しみ方を知らなかった事に気が付いた。

そしてこの森の一部は私有地だと後に知り驚いた。私は今回の旅で幾つかの森を歩き、日本の森との違いを見つけた。ゴミ箱が様々なスタイルで自然に溶け込んでいた事。例えば、設置場所は勿論目立たない所、中身は見えず木で囲まれていたり、深緑に塗られていたり、又鳥などのいたずら防止対策には、重たい蓋で固定されている物も多かった。そのせいか溢れているゴミ箱を目にしなかった。次に驚いたのが余りにトイレがきれいだった事。ある森のトイレの入り口には泥を落とす靴磨きの様な物が置いてあったり、心配りが窺えた。叔父、叔母が言っていた、デンマーク人は綺麗好き、自然好き、と言う言葉に納得した。

4時間コースも終わりに近づき、デンマークの自然に親しめたことに感謝しました。

そして今、私は日々変化する百草の里山を歩きながら、デンマークで多くの人の出会いや、多くの風景を思い出しています。

# 自然観察会が倉沢里山にやって来ました

緑の推進委員　川崎　明

９月２９日、日野市と緑の推進委員共催の自然観察会が行われスタッフ入れて47名の市民参加者があり、初秋の倉沢の里山を散策しました。百草園駅から30分位で第一緑地に着くと予定を立てていたのですが、途中での熱心な観察で1時間もかかってしまいました。

先ずは、皆で森の手入れをしている第一、第二緑地の木々の観察、夏になると子供達がカブトやクワガタを捕まえに来る話しに「良いところですね」の声が上がります。そして石坂明紫さんの山に上がり、ギンリョウ草、リンドウ、竹林の中のハナワラビ等見て「少なくなってきているのがよく残っていますね」と詳しい人の声がします。山を下った小道沿いの小さな涌き水には沢蟹がいることを紹介、石坂明紫さんのお宅では昔の養蚕の道具など見せていただきました。

途中、都の希少種に指定されているヤブムグラを観て、菜園のある台地の上がると雰囲気は一気に変わり、三々五々畑仕事を楽しんでいる方々と声を交わしながら由木養鶏場に向かいました。ご主人の由木武寿さんはこの一帯が、山伏の修行の場、万蔵院があつたこと、卵のこと等話して下さいました。そして昔、谷戸田の水に使っていた涌き水がある池を見て、蛍やトウキョウサンショウウオは居ないのかな等話しながら菜園に戻ってきて解散となりました。

この日はリンゴ園の今年最初の売り出し日、青空に赤いリンゴよく映えています。多くの方々がリンゴのもぎ取りを楽しんで帰って行かれました。

尚、植物の案内をして下さったのは峰岸立枝さん、資料にしたメルヘンチックな絵地図を描いて下さったのは田村はる子さんでした。

# 百草谷戸散策会に参加して

宮崎　竜一

今回の散策会は４月に交通事故をおこして入院以来、久し振りに百草に帰ってからの散策で何よりも大木氏の百草ファームでの牛乳試飲や、自身どれだけ歩く事が出来るかも含めて大変楽しみにしていた。田村さん宅前で本日の案内役峰岸純夫氏より散策マップを頂き出発した。しばらく歩くと愛泉会横の山裾が禿山になっており貴重な緑地がまた失われていた。百草谷戸に入り市内最後の酪農家、大木氏の百草ファームを訪ね、氏より現況説明を伺い氏所有の裏山にご案内頂きその後牛乳試飲をした。裏山は勿論初めてなのだが眺望も大変良く百草谷戸を一望出来た。市内で最も豊かな自然の残るこの地域にも住宅開発の波が押し寄せて来たという印象を受けた。そして牛乳は大変美味しくまろやかな甘味があった。大木氏の御好意に感謝しつつ近い将来百草ファームブランドの各種乳製品の直売等、是非実現して頂きたいものである。古道と六地蔵では峰岸氏の説明で冥界の六道を色で表わした物で安永６年（1777）に建てられ破損が激しいが貴重な物であり市指定文化財へ向けての動きもあるとの事。速やかに文化財指定され、風化・崩壊を防ぎ修復を進めて欲しいものである。

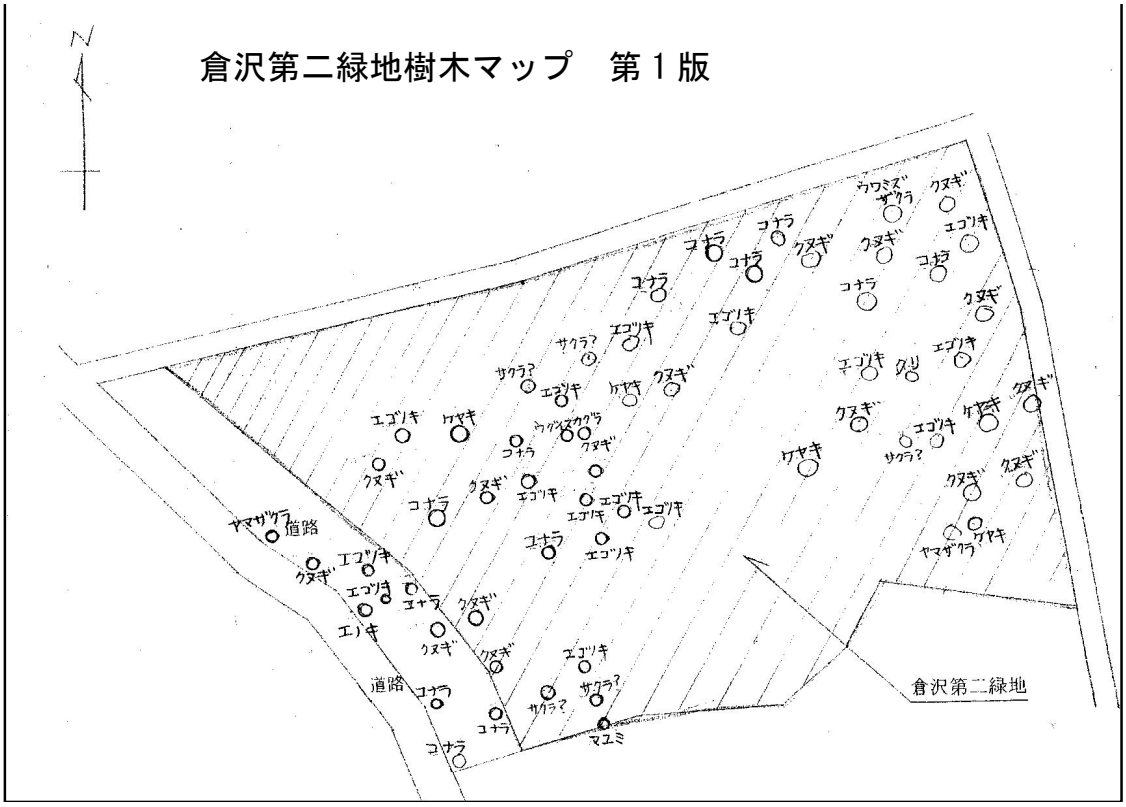
この付近一帯の里山の風景は実に素晴らしく、新宿より電車で３０分のこの地に奇跡的に残っている。私は百草でも古道と六地蔵、そしてこの里山の原風景が最も好きな所である。せめてここだけはいつまでも残して欲しいと思うのは私だけではないだろう。その為にも私達市民と生産者、地権者そして行政とが保全する為の問題点を解決すべく連携をとり、それを実現する良い方法を探って行きたいものである。各地の様々な保全の成功事例等、関係法令等も含め会としても見聞を広め関心を持ってゆかなければならないしもっと百草、倉沢の良さを地域外の人々に広くＰＲしていく必要があるのではないだろうか。今回は体力が十分回復しておらず大変疲れたが非常に楽しかった。是非また近いうちに次回の散策会を企画して頂きたいものである。

# 倉沢第二緑地　樹木マップ作りに着手

日野市 緑と清流課　加藤　勝康

9月15日に行われた倉沢緑地ボランティア活動の際に、ボランティアの皆さんの協力をいただき、倉沢第二緑地の樹木を調べ図面上に落としました。この緑地は平成７年に緑地を保全する目的で市が取得したものですが、樹木台帳の作成が必要とされています。今回の下草刈りと野草の保護作業に合わせて、樹木の名前を覚えていただいたり樹木調査法を紹介できればと思い作業を行いました。その成果は図のとおりですが、まだ完成していません。これからの緑地管理の作業としては、下草刈りや落ち葉掃き、そして間伐や萌芽更新作業などが考えられますが、ボランティアの皆さんの意見を伺いながらより良い林にしていきたいと考えています。また、冬でなければできない自然観察として、冬芽の観察があります。このような観察を行いながら樹木マップを完成していったらいかがでしょうか。

倉沢第二緑地樹木マップ　第１版



# 身近な百草谷戸の新たな発見

中尾　ひろえ

多摩丘陵のはずれで日野市南東の百草地域には、倉沢川沿いの倉沢の谷戸と単に谷戸と呼ばれていた地域、百草谷戸がある。私は百草谷戸をこれまで何回か歩いたことがある。しかし、大抵倉沢を見学した後行ったり、百草自然公園から高幡へ抜けるコースだったりした。

今回の散策会は百草谷戸を中心とするもの。出発地点が倉沢緑地で、倉沢のことはよく知っているが東電学園の向う側の谷戸は行ったことがないという人も多い。

10月20日（土）はハイキング日和で、参加者も40人はいただろうか。長い列のしんがりを板橋から来たという人と一緒にゆっくり歩く。倉沢川を暗渠化した倉沢緑地を通り、東電学園下の多摩市域の道を歩いていくとかつて池のあった場所が埋められ、斜面地の樹木が伐採され、宅地造成の最中であった。「マンションが建つのですか」と聞くと、一戸建てだという。せめて緑を愛する人に住んで貰いたいと願う。

東電学園の入口付近を少し上り、右に入ると百草谷戸の地域になる。バスも通らない狭い道は昔の古道の風景を残している。峰岸純夫会長の説明によると、一の宮から百草園へ行く道、真慈悲寺への道はこちらが旧道で府中方面から松連寺へ詣でる参道であった。

古道を下り左折して大木牧場を訪ね、日野市唯一の牧場を通って裏山を見せてもらった。中腹から南方の東電学園の方を眺めると、眼前に畑や雑木林が広がり、まさに里山風景であった。今は田んぼはほとんどなくなっているが、随所に湧水が湧き出ているそうだ。しばし、丘と谷間ののどかな風景を楽しんだ。牛舎の前でいただいた朝搾った牛乳は甘くなつかしい味がしてとてもおいしかった！

少し戻って古道を上り六地蔵を訪れる。1777年に念仏講中が建てたものというが、破損が激しい。峰岸会長が赤色地獄道、白色人道、黄色餓鬼道、黒色畜生道、赤色修羅道、青色天道の六道の説明をされた。貴重な史跡だが朽ち果てる前に何らかの保存の手段が講じられないものか。花などが飾られていたので守る人たちはいるようだが、歴史の証人でもあるのだから大切に守りたい。そう思って歩いていくと、Ｔ字路に六地蔵へ行く道を差し示す新しい標識が立っていた。誰かが立てたようだ。

野鳥供養碑も初めて見た。昭和二十八年に建てられたものであるが、この辺一帯が野鳥の狩り場で霞網猟が禁止になるまでツグミがいっぱいいたようだ。資料の「散策マップ」によると、ツグミはこの辺の方言で「ちょうまん」という。日本信販住宅のはずれ、杉野グラウンドの隣にある「ちょうまんぴら公園」は、ツグミがたくさんいた高台の名残として命名したらしい。

百草園入り口で、お出かけになる峰岸会長と別かれ、百草八幡神社の石段を上って境内の静寂さを味わい、ひとまず現地解散した。スダジイの古木は数年前までは周辺が暗くなるくらいもっと鬱蒼としていたが、隣にマンションが建ち、景観も様変りしてしまった。

帰路は思い思いのコースをたどり、再び倉沢緑地に戻って、スイトンをいただいた。

東電学園の周囲をまわる約2時間のミニハイクであったが、あまりきつくない坂あり谷ありで、快い汗を流すことができた。そして、改めて百草・倉沢の緑地を次世代に残す方策を模索しなければならないと思った。

# 倉沢むかし・昔

## 第２回　　修験の道場 万蔵院

峰岸　純夫

多くの方々が菜園などで利用しており、前号にも原始古代の遺跡地として紹介された倉沢地区の広い台地「万蔵院台」は、なぜこのような地名を持っているでしょうか。実はこの地に万蔵院という修験（しゅげん）の道場（寺院）があったからです。修験というのは山岳信仰と仏教が結びつき、紀伊半島の熊野・大峰・金峰山、出羽三山、四国の石槌山、九州の彦山などの霊山を経巡って修行して信仰を深めるというものです。全国各地に村々に拠点の道場（寺院）があって、そこを管轄する修験者（山伏・僧侶）は信者を集めて山伏姿をさせて、その集団の先達（案内者）となって霊山巡りの旅に出かけたのです。今日の旅行業者に信仰が加わったものと思って下さい。修験者は、日常的には加持祈祷をして病魔や災厄を退散させたり、自然の薬草を使用して病気を直す医療行為を行い、また家を造るときの地鎮祭などの祈祷もしていました。この万蔵院は、現在鶏卵業を営んでいる由木さんの屋敷地に立地していました。由木さんの先祖が江戸時代初期の寛永年代に修験の道に入り、この地の京都聖護院流の本山派修験の道場（寺院）をつくり、木曽村（町田市）の住善寺覚円坊の末寺として江戸時代を通じて存続しました。明治の神仏分離の際に由木さんは僧侶を辞めて神職の道を選び、万蔵院は廃絶し地名として残されたのです。

由木家に残された文書に享保七年（1722）の壇方寄進帳があり、本尊の不動明王を造るために倉沢・百草・和田などの７５人の人々が寄進をしており、その内訳は石坂姓２２人を筆頭に大木・増島・峯岸などが続いています。また「念仏講衆当村女中十三人」が金２分を寄進しており、女性の念仏講（女人講）があったことが知られます。延享３年（1746）には、木曽村覚円坊の横暴を多摩地区の修験１１ヵ寺が本山の聖護院に訴えている興味深い文書もあります。

鬱蒼とした樹林に囲まれた由木さんの屋敷内に入ると今も当時の修験道場の面影を体感することが出来ます。

### ☆☆☆☆☆　事務局から　☆☆☆☆☆

☆本号はパソコンに続いて編集者まで壊れてしまい、発行が少し遅れてしまいました。おわびします。サブのパソコンで作成していますがちょっと調子が狂っています。２・３面はモノクロで作ってみました。11月のボランティア活動は諸般の事情によりお休みとさせて頂きました。ご了承ください。

☆昨年ご好評頂いた由木ファーマーズの「ヘチマ水」が今年も取れました。１本 500 円でお分けしています。事務局田村までお問い合わせ下さい。

☆次号のニュースレターは１月１日発行の予定です。記事や写真・イラストなど、紙・ＦＤは田村宅のポストに、E-mail は、*alice-fm @ mail.hinocatv.ne.jp* へ。